

仮想結果の説明が課題遂行に及ぼす効果

Effects of Hypothetical Explanation on Task Performance

大 坪 靖 直

Yasunao Ohtsubo

原因帰属の研究には、人はどのような時どのような事柄に原因があると判断するかといった、帰属の先行条件を検討したものと、ある帰属を行うとその後の態度や行動がどのように変化するかといった、後続する事象に対する帰属の効果を検討したものがある (Kelley & Michela, 1980)。ただし、そこで扱われる帰属の対象は、既に生じた事柄のみに限定されていた。ところが、近年、社会的事象に対してなされる因果的説明、あるいは、理由付けの効果に焦点を当て、まだ生起していない事象に対して特定の結果を仮定し、その結果の原因説明をすることによって、当該事象に関する行動がどのように変化するかという問題が検討され始めた。

Sherman, Skov, Hervitz, & Stock (1981) は、これから行う言語課題について、仮想結果 (成功／失敗) の因果的説明を求めると、実際の遂行成績が説明を求めた結果と対応することを報告している。彼らは、この現象の生起過程を次のように解釈している。たとえ仮想された結果であっても、その説明を求められると、その結果と関連した自己の特性を検索しなければならない。その結果、仮定された結果に関連した自己の特性が顕在化され、仮定された結果が本当に生起するだろうという主観的確率が高められる。すなわち、仮定された結果が本当に生起するだろうという自己期待が形成され、その期待に一致するように現実の行動を調節するのである。

ただし、失敗の仮想説明によって失敗の自己期待が形成されるためには、仮想説明の直後にその期待表明をさせることが必要であると指摘している。失敗の説明を求めても、そ直後に期待表明をさせないと、結果そのものがネガティブなものであるために失敗を回避しようとする動機が強められ、かえって遂行成績を向上させる。すなわち、期待表明という操作によって、強い自己期待が形成されると考えられる。これに対して、成功説明の場合は、結果そのものがポジティブなものであるために、期待表明の有無にかかわらず、遂行成

績を向上させる。

ところで、初めて取り組む課題について、純粹に仮定された結果だという教示は受けているものの、成功あるいは失敗の因果的説明を求められる実験状況は、この現象に実験者期待効果が混入している可能性を推測させる。そこで、本研究では、仮想結果の説明が遂行期待と遂行成績に及ぼす効果を再検証するとともに、実験者期待効果が共生起しているかについても検討を加えることにした。本研究の仮説は以下に示すとおりである。

仮説1：課題遂行に対する期待は、説明を求められた結果と対応するだろう。

仮説2：現実の遂行成績は、期待表明を行う条件では、遂行期待を媒介して、説明を求められた結果と対応するだろう。しかし、期待表明を行わない条件では、仮想結果のタイプにかかわらず、説明を求めると遂行成績は向上するだろう。

仮説3：もしも、実験者期待効果が共生起しているのならば、実験者期待の認知は説明を求められた結果と対応するだろう。具体的には、成功の説明を求められた被験者は、自分 (被験者) は成功するだろうという期待を実験者が抱いていると認知し、失敗の説明を求められた被験者は、失敗するだろうという期待を実験者が抱いていると認知するだろう。

方 法

被験者 大学生72名。

手続き 3 (説明条件：成功、失敗、統制) × 2 (期待表明条件：あり、なし) の計6条件に被験者を12名ずつ無作為に割り当て、個人ごとに実験を実施した。まず、全被験者に18項目からなる自分自身のパーソナリティ評定 (例えば、よく早合点をする、論理的な方だなど) を実施し、アナグラム課題 (文字の並べ替え課題：うがたゆーゆうがた) の説明を行った。パーソナリティ評定は、仮想結果の説明を求めたときに自己に注意を向けさせるための操作である。そして、成功説明条件および失敗説明条件の被験者には、これから行う

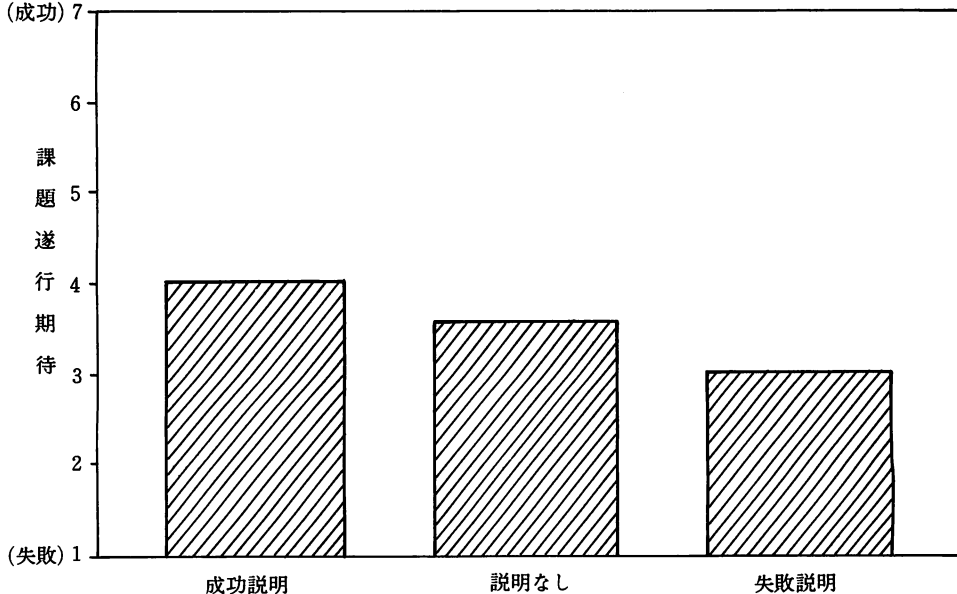
課題に成功、あるいは、失敗したと仮定し、そのような結果が生じた原因を思いつく数だけ記述させた。なお、その結果は、純粹に仮定されたものであることを強調して教示した。回答された原因数は平均3.3個で、そのほとんどが内的属性だった。統制条件では、仮想結果とその説明に関する教示は一切行わなかった。

つぎに、各説明条件の半数（期待表明あり条件）の被験者には、これから行うアナグラム課題の成績予想を7段階で回答させた。その後、全ての被験者に36題からなるアナグラム課題を5分間で実施した。課題終了後、主観的評価（どの程度うまくできたか）、満足度評定（その結果にどのくらい満足しているか）、帰属評定（その結果に能力、課題の困難度、努力、運がどの程度影響を与えたと思うか）に7段階で回答させ、最後に、実験者期待の認知（実験者は、あなたがどのような成績をとると予想していたと思うか）に7段階で回答させた。

実験に要した時間は、成功・失敗条件で約15分、統制条件で約10分であった。

結 果

遂行期待 仮想結果の説明による遂行期待の違いを検討するために、1要因分散分析を行ったところ、説明条件の主効果が有意な傾向を示していた（成功）7



注) 数値が大きいほど、課題に成功する期待が大きいことを示す。

Fig. 1 各条件における課題遂行期待の平均値

($F_{(2,33)} = 2.71, p \leq .10$)。多重比較の結果、成功説明条件の方が失敗説明条件よりも成功の期待が相対的に高かった。各条件の平均値は、成功説明 > 統制 > 失敗説明の順であり、仮説1を支持する様相を示していた(Fig. 1)。

遂行成績 仮想結果の説明と期待表明による遂行成績の違いを検討するために、 3×2 の分散分析を行ったところ、説明条件の主効果が有意であった ($F_{(2,66)} = 3.25, p \leq .05$)。多重比較の結果、失敗説明条件の方が統制条件よりも遂行成績が悪かった。(Fig. 2)。しかし、予想された説明条件と期待表明条件の交互作用効果は有意ではなかった ($F_{(2,66)} < 1$)。

実験者期待の認知 仮想結果の説明による実験者期待の認知の違いを検討するために、 3×2 の分散分析を行ったところ、いずれの効果も有意ではなかった (Table 1の最右列)。

その他の従属変数 その他の従属変数についても、条件間の差異を検討するために、 3×2 の分散分析を行った (Table 1)。有意な効果のみを以下に示す。

満足度について、説明条件の主効果が有意な傾向にあり ($F_{(2,66)} = 2.95, p \leq .10$)、多重比較の結果、統制条件よりも失敗説明条件の満足度が低かった。

努力帰属について、説明条件の主効果が有意で

あり ($F_{(2,66)} = 4.86, p \leq .05$), 多重比較の結果, 成功説明条件と統制条件に比べて失敗説明条件の方が, 遂行結果を努力に帰属することが少なかった。

運帰属について, 説明条件の主効果が有意であり ($F_{(2,66)} = 3.67, p \leq .05$), 多重比較の結果, 成功条件よりも失敗説明条件の方が, 遂行結果を運に帰属することが少なかった。

考 察

仮想結果の説明が遂行期待に及ぼす効果については, ほぼ仮説どおりに支持された。仮想結果の説明を求めると, その結果と対応した自己の特性が検索され, 顕在化される。この時, 遂行時期の表明を求めると, 顕在化された特性が利用されやすいために, 遂行時期は仮想結果の説明と対応するのであろう。

Table 1 各条件における主観的評価、満足度、原因帰属量、および実験者期待の認知の平均値

期待 表明	説明 条件	従 属 変 数						
		主観評価	満 足 度	能力帰属	課題帰属	努力帰属	運 帰 属	期待認知
あり	成功	3.92	3.83	5.67	5.50	5.33	4.42	4.08
	統制	3.50	4.00	5.50	4.75	5.25	4.08	4.00
	失敗	3.42	2.92	5.50	4.08	4.83	3.92	3.33
なし	成功	4.17	3.83	5.25	4.50	5.08	4.50	4.00
	統制	3.83	4.25	5.42	4.75	5.25	4.25	4.08
	失敗	3.25	3.42	5.50	4.42	3.83	2.83	3.75

注) 数値が大きいほど評価、満足度、帰属量、および実験者が抱いていたと思う成功期待の認知が大きいことを示す。なお、レンジはすべて1-7である。

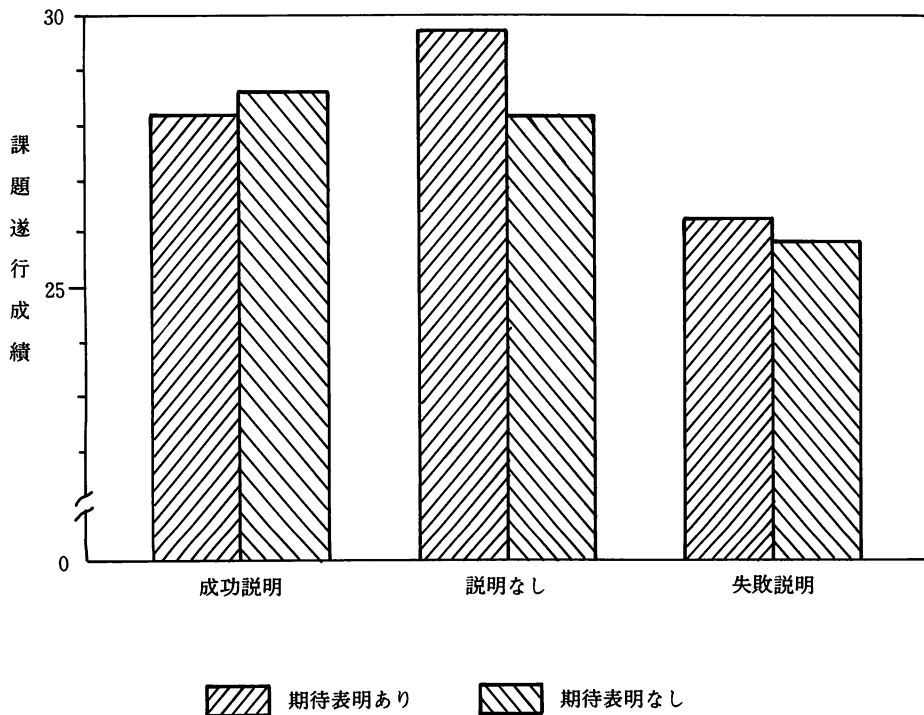


Fig. 2 各条件における課題遂行成績の平均値

仮想結果の説明が遂行成績に及ぼす効果については、仮説とは異なる様相を示していた。まず、仮想結果として失敗の説明を求めた場合、期待表明の有無にかかわらず遂行成績の低下がみられた。この結果は次の2つの可能性を示唆していると思われる。ひとつは、期待表明を行わなくても失敗の期待は形成されることであり、もう1つは、仮想結果の説明が遂行に影響を及ぼす過程には、期待を媒介しない過程が存在することである。前者に関しては、Sherman et al. (1981) が指摘する失敗回避動機が高められなかったことが関与していると思われる。いずれにしても、仮想結果の説明が遂行成績に及ぼす効果の媒介過程については、遂行期待ばかりでなく、動機付けにも焦点を当てて検討する必要があるだろう。

また、成功説明の効果がみられなかったが、その理由の1つとして、課題に対する動機付けの高さが考えられる。動機付けは自己期待の成就過程を媒介していると推測されるが、基本的に被験者の動機付けのレベルが高い場合には、成功説明条件で天井効果を起こすことが推測される。このよ

うな自己期待の成就過程に関する問題は、今後の研究課題と考えられる。

実験者期待効果については、課題遂行後に測定した実験者期待の認知を測度に検討したところ、その共生起は確認されなかった。しかし、この問題については、異なる研究法や測度を用いて、今後も検討を続ける必要があると思われる。その他の従属変数についても、仮想結果の説明を求める効果が一部でみられ、失敗説明条件の被験者は自らが予期した失敗の原因を不安定な原因に帰属しない傾向が示された。

以上のように、Sherman et al. (1981) が報告している仮想結果を説明することの効果は、遂行時期については再検証されたが、現実の遂行行動に関しては十分に検証されなかった。仮想結果を説明することが持つ自己暗示に似た効果は、有益な自己コントロール法となりうる可能性がある。しかも、その応用範囲はきわめて広いことが予想される。人は、自ら望んで失敗しているわけではないが、失敗を予期することで、自らを失敗の方向へ導いているのかもしれない。

引用文献

- Kelley, H.H., & Michela, J.L. 1980 Attribution theory and research. *Ann.Rev.* 31, 457-501.
- Sherman, S.J., Skov, R.B., Hertz, E.F., & Stock, C.B. 1981 The effects of explaining hypothetical future events; from possibility to probability to actuality and beyond. *J. Exp. Soc. Psychol.*, 17, 142-158.